

発	達	心	理	学	用	語	講	座	(K	式	編	2)		
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	9	
												大	谷	多	加	志

先日、相談支援従事者初任者研修という研修に出席しました。地域の障害福祉に関する相談を受け、必要に応じて適切なサービス利用の計画を立てる役割と位置付けられています。

このこととも関連して最近気になっていたことがありました。発達検査の講習会の受付をされていて、成人期の障害福祉に関わる事業所の方が講習会を受けに来られる頻度が増えていることです。受講の動機は様々です。「大人の方であっても“発達”の視点を持って理解し、関わりたい」という方から、「成人の事業所ですが、今度児童も開設することになったので必要と思って」という声もありました。

相談支援に限らずですが、障害福祉の領域で「アセスメント」が強調されるようになってから、フォーマルなアセスメントである知能検査・発達検査への関心も高まりました。発達検査を学ぼうという動機づけが、成人期の支援に携わる方にも広がっていることは、計画相談をはじめとする支援のシステムのあり方と、無関係ではないように思います。

発達検査に関心を持つ方が増えることや、発達の視点を持って支援しようとする方が増えることは、喜ばしいことなのだと思います。

しかし、これまでの連載でも述べてきたように、発達検査は限界や有効性、危険性を十分に理解した上で活用するものだというのも、一方で意識しておく必要があると考えています。そのような動向も踏まえつつ、今回は「Milestone と Sequence」「系列化」の2つの用語を取り上げます。

「Milestone と Sequence (マイルストーンとシークエンス)」

心理職の国家資格化の動きとも関連して、最近では心理検査、知能検査の使用資格が取り沙汰されるようになってきました。心理検査は、心理士等の基礎資格を持った者だけが使えるように制限されていくであろうという声も聞かれます。新版 K 式発達検査については、現時点では特定の資格を所持しているかどうかを使用者の要件にはしていません。しかし、心理検査等を取り巻く今度の動向は注意深く見ていく必要があると思っています。

現在、新版 K 式発達検査には、「使用者

規定」というものが設けられています。細かな文言までは述べませんが、概要を言えば「検査を使用する人には、このような資質を求めます」という要件が書かれています。使用者規定の要件は大きく分けて以下の2つがあります。

1つは、新版 K 式発達検査の実施についての知識と技術を持っていることです。新版 K 式発達検査には 328 の検査項目があり、項目ごとに実施手順や評価の基準が定められています。検査の使用にあたっては、こうした実施手順等について理解しておいて頂くことが必要ですし、臨床の場で活用するには一定の現場経験も当然必要になってきます。また、心理検査全般に関する基礎知識や使用上の倫理的配慮についても理解していることが求められます。

もう 1 つは、発達についての一定の専門的知識を有していることです。一定の知識とはどのような内容かを明確に示すことは難しいのですが、規定の中では「概ね大学院修士課程修了程度」の専門的知識とされています。ハードルが高いように感じられるかもしれませんが、それだけの覚悟と自覚を持って使用するものだと受け止めて頂ければと思います。

それでは、ここからは発達検査を使用するために何故「発達検査の実施についての知識と技術」と「発達についての専門的知識」が求められるのかを、「Milestone と Sequence」という用語を通して考えてみようと思います。

Milestone (マイルストーン) は、日本語では「里程標(りていひょう)」と言います。起点から何里の位置にあるのかを示す標(しるべ)であり、東海道等の設置されて

いる一里塚もこれにあたります。東海道の一里塚は東京の日本橋を起点として一里(約 3.927 キロメートル)ごとに設置されていて、日本橋から 9 里の位置の品濃一里塚、14 里の茅ヶ崎一里塚など、現存しているものも多くあります。この里程標があることで、起点から現在地までの距離や、目的地までの道のりがわかるわけで、当時の旅人にとっては貴重な道標であったことと思います。目的地までの距離によって「到着まであと何日くらいかかりそうか」「日暮れまでに次の宿場までたどり着けそうか」「急いだ方がいいか」「焦らず早めに今日の旅程を切り上げた方がいいか」等を判断し、今の歩み方を決めることが可能になるでしょう。

発達検査における検査項目は、発達の「Milestone」と言えるかもしれません。各年齢区分に配置された検査項目をどこまで「通過」しているかによって、発達の道のりの今どこを歩んでいるかを見ることが出来ます。その位置によって、次の「Milestone」を目指して出発するのか、今の地点で次に向かう準備を整えるのか、判断が異なってくるでしょう。

一方で、具体的な発達支援を行うためには、発達の「Milestone」を知っているだけでは不十分です。例えば、赤ちゃんの運動発達では「首すわり」や「お座り」「はいはい」「歩行」など発達の Milestone になります。また、首すわり→座位→はいはい→独り立ちの順に育っていくことは、育児書にも載っていますし、一般的にもよく知られていることです。しかし、お座りはしていて、まだはいはいはしない子どもに対して、どのように関わるのが発達支援になるの

かは、この「Milestone」を知っているだけでは判断できません。子どもの年齢やこれまでの発達の経過等を踏まえて、子どもの発達状態を理解する「発達の視点」が必要です。

この発達の視点の基盤となるものが、使用者規定で求められている「発達についての専門的知識」であるわけですが、これは言い換えれば発達を「Sequence (連続体)」として見ていく力です。発達支援を考えたときに、単に次の「Milestone」を目指すという発想では不十分です。そもそも、発達の「Milestone」を通過するのは子どもが日々の暮らしの中で体験し、経験し、試みたことの結果であって、次の「Milestone」を目指して歩んでいるわけではありません。これまでの連載でも述べたように、はいはいができるようになった子どもは「次は歩こう」と思って日々を送っているわけではありません。はいはいをしながら柵や机の上の物に手を伸ばそうと試みる中で、膝立ちになったり、つかまり立ちをしたりという経験を重ね、その結果として自力で立位になり、歩行も可能になっていきます。この時、子どものそだちの原動力となるものは、「周囲への興味と関心」です。発達の順序や段階という「Milestone」を念頭に置きながらも、その子のそだちのために今何を充実させるのかという「発達の視点」が、それぞれの発達のペースや道順を歩む子どもたちのそだちに寄り添うときには、重要になってくるように思います。

以上、発達検査の使用者規定にある、「発達検査の知識と技術」と「発達の専門的知識」について、「Milestone」と「Sequence」という観点から整理してみました。今後、

発達検査を含む心理検査等の取り扱いがどのように変化していくのかはわかりませんが、最も大切なのは検査が有効に活用されるために必要なことは一体何なのか、という点です。多くの人にとってわかりやすいよう、一定の基準は必要かもしれません。しかし、それが必ずしも特定の「資格」によって担保できるものなのかという点は疑問の余地もあります。検査が有効に活用されていくことを願いながら、今後の動向に注目していこうと思います。

「系列化」

ある日、2歳の息子が積木で遊んでいました。遠目に見ていると何やら「おとーさん」「おかーさん」などつぶやいています。しかし、どう見ても人形などは持っていません。一体何をしているんだろう？と興味がわいてきました。後ろからそっと覗いてみると、大きさの違う積木を大中小の順番に並べ、動かしていました。どうやら一番大きな積木が「おとーさん」、中くらいの積木が「おかーさん」、小さい積木が息子のようです。並べたり動かしたりするくらいで、それほど発展する遊びではなかったのですが、とりあえず妻よりも大きな積木に自分にあてがってくれたことに妙にホッとした覚えがあり、記憶に残っています。

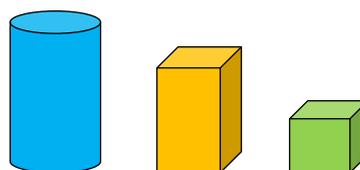


図1. 積木の系列化

物事をある一定の基準に沿って順序立てることを「系列化」と言います。息子は積木を「大きさ」という基準によって、大中小の順に並べ、そこに人のイメージを重ね合わせて遊んでいました。興味深いのは、ひとたび「大きさ」を基準にすると、積木の形や色など、他の要素は無視して1つの基準によって順序立てができることです。この連載のテーマである新版K式発達検査の検査課題においてもこの「系列化」の観点が含まれるものが少なからずあります。今回は「系列化」という点から、検査課題について考えてみようと思います。

系列化において、①何を基準にするか、②いくつの物を対象にするかは重要な点です。まず②から考えます。対象物が2つであれば、単純に基準に則して2つのものを比較すればいいだけです。ですが、対象物が3つになると $A>B>C$ という3つの関係性を捉えることが必要になります。

次に①ですが、基準とするものの性質によっても、難易度が大きく異なります。3つの対象物の系列化を考えてみましょう。例えば「大きさ」を基準とした場合であれば、 $A>C$ と並べた後、Bをどこに位置付ければいいかはすぐに判断できます。

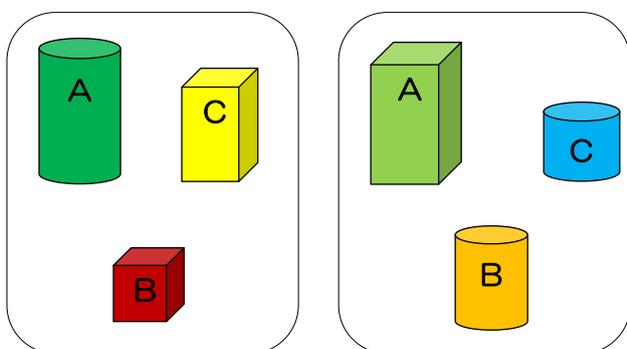


図2. Bをどこに位置付けるか？

図2の左側の例であれば $A>C>B$ の順、右側の例であれば $A>B>C$ の順に、すぐに位置付けることが可能でしょう。

一方、基準が「重さ」だったら、どうでしょう。AとBを比べて $A>B$ とわかった後、AとCを比べて次は $A>C$ だとわかったとしても、BとCの関係はまた改めて比較しないと判断することができません。

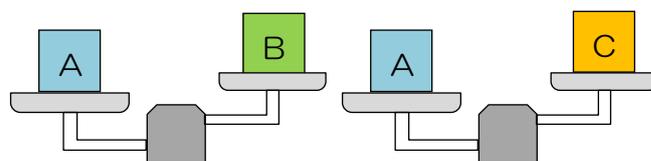


図3. $A>B$ 、 $A>C$ 。さてBとCの関係は？

同時に複数の対象の比較が可能な基準（大きさなど）と、一対ずつしか比較できない基準（重さなど）で難易度が異なります。また一対ずつしか比較できない基準では、対象物の数が増えるほど組み合わせが多くなっていきますので、この差はより大きくなっていくと考えられます。

「系列化」や、その「対象物の数」「比較の基準」などの観点から、検査項目の構成要素を改めて見直してみるのも、面白いのではないのでしょうか。

バックナンバー

- 第10号 発達検査でわかること
- 第11号 通過・不通過
- 第12号 解釈・見立て・所見
- 第13号 検査手続き
- 第14号 導入
- 第15号 発達検査でわかること②
- 第16号 発達検査のもつイメージ
- 第17号 発達心理学用語講座 (K式編)